

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00477

研究課題名(和文) ステファヌ・マラルメの「文学基金」と火曜会から見た「文芸共同体」の理念と実際

研究課題名(英文) The idea and practice of the "literary community", views of Mallarme's Mardis (salons on Tuesday in the rue de Rome) and his "literary fund"

研究代表者

中畑 寛之 (NAKAHATA, Hiroyuki)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70362754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ステファヌ・マラルメがイギリスで行った講演『音楽と文芸』および「文学基金」という提言に対する出版界の反応(特に『フィガロ』紙のアンケートなど)を翻訳した。これは、詳細な解説と新資料の読解も加えて、できるだけ早く公にしたい。

マラルメが見定めていた「文芸共同体」のあり方を相対化する形で、19世紀後半に風俗壊乱などで出版差止めや一部削除を命じられた作家たちがその再刊において採った戦略の事例を具体的に分析した。また、ボードレールの仕事の継承と展開、そして次世代への遺贈として、『悪の華』の詩人とマラルメの関係を問い直した結果、思いがけずデカルトの言霊を聴きとることになり、短いエッセイに仕上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1890年代のマラルメが繰り返し問うた「文芸共同体」の理念と実際を明らかにするにあたり、権力に抗して「書く自由」を求める同時代の作家たちの連帯や友愛の事例を具体的な分析し、またボードレールとの関係を継承・展開・遺贈という観点から問い直すことで、火曜会という集まりが見せる姿とはまた別の角度から「文芸共同体」のあり方を考えることができた。いくつかの未発表書簡を発見することができ、マラルメを中心に「精神の握手」が紡ぎ上げていたネットワークについて新しい知見を加えることができたと思う。当初の目標であった『音楽と文芸』の翻訳刊行が実現すれば、学術的にも社会的にも大きな成果となるにちがいない。

研究成果の概要(英文)：I have translated the "Music and Letters", lecture which Stephane Mallarme; was invited to give in England, as well as the reaction of the publishers to the proposal for a "Literary Fund", including in particular the interview published in Figaro. These translations, together with detailed commentaries and readings of new manuscript documents on the Literary Fund, will be made public as soon as possible.

In relation to Mallarme's vision of the literary community, I have analyzed specific examples of the strategies adopted by writers in their reprints after being ordered to cease publication or to withdraw parts of their works, for reasons such as the destruction of public morals in the second half of the 19th century. And also, as the legacy of Baudelaire's work, its development, and a gift by Mallarme; to the next generation, I reviewed the relationship between these two poets. This unexpectedly led me to hear the echo of Descartes' thought, which I have turned into a short essay.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ステファヌ・マラルメ 火曜会 文芸共同体 文学基金 19世紀末フランス

1. 研究開始当初の背景

当時、ステファヌ・マラルメ研究はひとつの転機を迎えようとしていると思われた。日本においては1989年から刊行の始まった『マラルメ全集』全5巻(筑摩書房)が2010年に完結、そして2014年には渡邊守章訳の『マラルメ詩集』が岩波文庫に入り、ひとつの「事件」となった。その間、外国人研究者のモノグラフ翻訳だけでなく、日本人による優れた著作も次々に現れていた。一方、世界に目を向けると、誰もが認める第一人者ベルトラン・マルシャルが1988年に世に問うた『マラルメの宗教』以降、研究史におけるひとつの大きな潮流が生まれており、詩人の死後100周年にあたる1998年には実に多くの関連書籍が本屋の棚を飾っていた。また、未完成のまま遺された作品の自筆草稿のトランスクリプションも充実させたプレイヤード版『マラルメ全集』(全2巻、ガリマール社、1998/2003年)が新たに編まれ、予定より少し遅れたものの2019年には300通を超える未発表の手紙を加えた大部の『書簡集』も遂に上梓されている。信頼できる校訂がなされた全集、有益な情報の詰まった書簡集や関連資料、さらには幾つかのテキストに関しては自筆原稿までがネット上で手軽に閲覧できるほど、次世代のマラルメ研究を打ち建てる土台は十分に整備されていた。その基部の一角に研究代表者が作成した『ステファヌ・マラルメの書斎』を加えてもよいかもしれない。この資料は、マラルメ記念館が所持する蔵書すべて(約1200冊)を精査し、また『書簡集』や古書店カタログなどから得た情報も加えて、詩人が読んだ、あるいは手にした可能性のある本を可能な限り網羅し、現物に当たったもので、海外の研究者からも好意的に受け入れられた(この『書斎』はその後、2015年10月のSotheby'sによるマラルメ関連資料売立ての際に実施した調査等を経て、大幅に書誌情報を増やすことができた。現在その改訂版を準備中である)。

一次資料は、誰もが活用できる形で、ほぼ出揃っていた。しかしながら、1998年以降、早くも20年が経過しようとしていた本研究の開始当初、海外で出版される単著などを読むかぎり、明らかになにか停滞といった影が見てとれたのである。前述した日本人研究者の仕事の多くは21世紀になってから公にされた成果だが、拙著『世紀末の白い爆弾 ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』(水声社、2009年)も含め、新プレイヤード版に依拠した新たな読み直しを提出するには至ってなかった(いまだと自らをこそ省みるべきだろう)。おそらくは、マルシャルの『マラルメの宗教』が指し示した道はすでにあまりにも多くの探究者たちに利用されてきたため、そこに穿たれた無数の轍にはまり込み身動きがとれないのかもしれない。それゆえ、新たな航路が希求され、模索されている時期にマラルメ研究は入っていたのである。

さて、研究代表者が2011-2016年度に取り組んだ二つの研究課題はまさにそのための準備作業として位置づけられ、十分な成果があったと考えている。あいかわらず論文にまとめられていないものが多いとはいえ、19世紀末フランス・ベルギーの出版界の状況について十分な調べはできていた。その他、必要な史資料の閲覧などについても、マラルメ記念館とは特に友好的な関係を築けていたなかで、本研究は、これまでほぼ無視されてきた「文学基金」というテキストの再解釈を試みると同時に、当時の文学場に対するそのジャーナリスティックな効果を探りつつ、また詩人が主催していた火曜会を「文芸共同体」の実践例として具体的に検討しその理念を明らかにすることで、マラルメ研究の新たな展開を目論むものであった。

すでに2005年来、四件の研究課題から得られていた諸成果のうち、『ステファヌ・マラルメの書斎』および詩人自身の著作に関して作成した基礎資料、そしてマラルメ記念館が蔵する数々の史資料をも十全に活用し、さらには研究代表者が所有している未発表草稿の解読を進めるこ

とで、マラルメが夢想していた「文芸共同体」のあり方を国際的かつ多角的に、つまりフランスだけでなく彼が視野に入れていたであろう広い意味での（当時のヨーロッパ的、さらには世界的な）文学場の実態、そこで提起される理念（『ディヴァガシオン』と題された一冊の本にひとまず纏められることになった批評群）、そしてさまざまに試みられた実践（特に火曜会や「文学基金」の提言）を検討し尽くすことで、自ら〈危機〉の時代もしくは「空位時代」と見定めた19世紀末フランス・パリに生きたこの詩人の文学的戦略の新たな側面を明らかにすることを目指していた。それはまた、社会における〈文学〉の役割をあらためて問い直し、その顕揚に繋がることになるはずであった。

2. 研究の目的

「文芸共同体」の設立、あるいはその創出は、90年代のステファヌ・マラルメにとって、青年期に年長の友人ルフェビュールと熱く語りあった空想的な計画（思いがけず後者の手に入った遺産をどう使うか）といった夢想ではすでになく、パリに居を定めた1870年代以降ずっと彼の頭にとり憑いて離れなかった重要な問題系のひとつなのである。この共同体は19世紀後半に次々と生まれては消えていった小雑誌という形態（己れの「半獣神」詩篇の掲載を第3次『現代高踏詩集』に拒否されたのち、すぐさま創刊に係わった『文芸共和国』誌はその典型的な例）を採ることもあれば、手紙や著作のやり取りといった「精神的な握手」によって形成される、文壇を超えて広がる多様な人的ネットワークとしてその姿を現すこともある。ローマ街の師が司る火曜会は、ささやかとはいえ、その具体的かつ長期的実現の模範例であり、他方で、不発に終わった「文学基金」の提言は、大手新聞『フィガロ』という発表媒体の制約、つまり購読者の日常的理解という経営者側による無用な配慮ゆえに、その政治・経済的側面のみで縮減されてしまったとはいえ、イギリス・オックスフォードのフェロー制度を実見したこの詩人がフランス第三共和制下において提言し得たその戦略的な対案でもあった。国家から与えられる援助に頼るのではなく、読者に負担を強いるのでもなく、文学の内部から、文芸それ自体によって成されるべき自助を企て、自立した制度としての〈文学〉の可能性を、文字どおり、文学そのもののあり方から考察したものである。つまり、文芸共同体（さらには、文字による共同性）はいかにして成立し得るのかを問う論考であり、マラルメ晩年の思考は、文学と社会とのあいだに実際のところいかなる関係を築く、あるいは再構することが可能かという問いの領域をさまざまに経巡っていたといえる。

マラルメは文学の社会的役割の重要性を折りにふれ主張し、批評を展開しており、その点に着目した研究もなされてきた。しかしながら、『フィガロ』紙に掲載された「文学基金」という記事は、彼自身が言うように、社主に命じられた書き直しをせざるを得なかったため、あまりにも即物的な提案になってしまったからか、これまで主要な分析対象になることはなかった。わずかに日本において、野口修が論文「マラルメの文学基金：作者、出版者、公衆」によってひとつの解釈を提示し、立花史も著作権史を踏まえた議論を粘り強く提示していた。さて、この「文学基金」はマラルメが考える「文芸共同体」のあり方を解釈する鍵であるだけでなく、我々が詩人が「出版する＝公にする」、すなわち作品を大衆の手に委ねるといった賭けの意義とも密接に関わっていくテキストだと考えられる。その理論と実践を明らかにしようと試みる本研究の進展に伴って、更にはその成果によって、将来的には「文芸共同体」という視座から火曜会という特異な場＝出席者たちの芸術的・社会的・政治的関係という複雑な網目について、国内外の研究者たちとも共同研究を実施できればとも考えていたのである。

3. 研究の方法

以上の研究目的を実現するため、研究代表者は「文学基金」に係わる未発表草稿、新聞に発表されたテキスト、そして『音楽と文芸』所収のテキストをそれぞれ解読する作業から始め、この提言について新聞・雑誌上に現れた反応も踏まえたうえで、上記の問題関心を念頭におきつつ、「文芸共同体」という視点からこの〈行動〉をあらためて多角的・総合的に捉え返し、大部数を誇る『フィガロ』紙の第一面で己れの主張を広く表明できたほとんど唯一の機会に、なぜこの一見「凡庸な」提言を敢えて行ったのか、マラルメの企図を解明したい。また、その結果を踏まえて、火曜会が有していたと考えられる機能のひとつ、つまり後継の文学者たちに対する精神的（かつ金銭的）援助という厄介な問題を分析する。

「文学基金」に反応した幾つもの新聞・雑誌記事に関しては、『書簡集』第7巻にその掲載紙誌名と概要が要約されているが、マラルメ記念館には詩人自らが専門の会社（L'Argus de la Presse）に依頼して集めさせたそれらの切抜きも保管されている。フランスだけでなく、イギリス、ドイツ、イタリア、さらにはアメリカなどの記事を含む未だ整理されていない資料体ではあるけれど、これを活用して、詩人の提言が有した社会的影響とそれに対する反発や無理解の理由を著作権の問題や出版界の現状等も絡めて実証的に論じる。研究代表者は幸い、「文学基金」についてマラルメがクレマンソーに宛てた未発表書簡1通、および「文学基金」発表後に準備されたと思われる関連資料を所持しており、これら新資料も活用するだけでなく、勤務先の神戸大学人文学研究科がオックスフォード大学との交流を深めているため、マラルメに講演を依頼し、「文学基金」を着想させる機会を与えたと思われる同大のテイラー協会とその活動実態を調査できればと考えている。

「文学基金」に関わる未発表草稿の読解においては、手稿を読み慣れた研究者個人の能力だけに頼るのではなく、資料をデジタル画像化したうえで、そのデータから特定の形を抽出するパターン認識の技術を応用することによって、手書き文字（マニユスクリ）の科学的な解読法を新たに構築できればとも夢想していた。理系の専門家の助けを請う必要はあるが、26文字しかないアルファベットで書かれたテキストに対してはかなり有効な手段ではないかと思ったのである。インクですっかり塗り潰された文字はさすがに無理でも、手書き文字とは違う運筆となる削除線などであれば、それをデジタル処理して、元のテキストを復元することもできるかもしれない。そのようなデータを蓄積することで、ジャック・ドゥーセ文学図書館をはじめとした各研究機関が所蔵するマラルメの手書き原稿の分析にも、また技術的な問題が解決されれば、他のさまざまな資料の解読にも活用できるにちがいないと大いに意気込んでいた。

本研究では、研究代表者がこれまで学術的情報等を発信してきたウェブサイト関西マラルメ研究会アルシーヴ « Mall'archives » (Yahoo! ジオシティーズで2005年から公開、現在はサービスが終了)を神戸大学のサーバー内へと移行させる(データベースを公的なものと位置づける)ことを目論んでいた。HPを大学という学術機関に置くことで、世界中の研究者が活用するに足ると同時に、最新かつ重要な情報を随時提供できる場として、恒久的な研究拠点に発展させるつもりであった。HP全体をリニューアルし、論文・研究書の書誌や一次資料の公開を中心にコンテンツのさらなる充実を図ることで、関西マラルメ研究会アルシーヴ « Mall'archives » が国際的な研究ネットワークの一部として機能し、人的な交流が活発になり、共同研究や国際共著論文執筆の機会が少しでも増え、その一助となればと願っていたのである。すでに電子化し公開していた『ディヴァガシオン』や雑誌掲載テキストの誤植を修正するだけでなく、他のマラルメ作品の電子化も随時進めながら、所収テキストの初出やヴァリエーション等のデータ検索を容易にし、関連する二次資料の情報なども加えていく予定であった。

4. 研究成果

上述した報告の微妙な語調からも明らかなように、本研究で設定していたその目的は残念ながら十分に達成できたとは言えない。2019 年末から始まった世界的なコロナ禍に対処するため、部局内で忙殺されただけでなく、パンデミックのあいだはフランスに赴いて資料調査をすることもできず、極めつきは期間延長した最終年度に研究代表者自身が緊急手術を受け、予想以上に長く入院する破目になってしまった。ひときわ集中力を必要とする自筆下書き (premier jet) の解読が進まない結果となり、忸怩たる思いである。したがって、『音楽と文芸』の翻訳、その詳細な解説、「文学基金」関連の未公開資料の読解と分析、そしてこの提言に対する出版界の反応(『フィガロ』紙に掲載された、シャルル・モリスらによるアンケートなど)を一書にまとめて刊行するという企画は先送りにせざるを得なかった。本研究の主たる成果となるはずのものであり、今後できるだけ早く公にしたいと考えている。

その反面、19 世紀後半のフランスで風俗壊乱などの理由から出版差止めや一部削除といった処罰を受けた本の再版にあたって、当の作家がどのような戦略を採るのかを考察する思いがけない機会を得た。フロベールやボードレールの事例は有名だが、国家が「道徳の教師」となるべく画策し、社会とその利益を「敵」から防衛しようとして、幾つもの文学作品を摘発していた。その裁判記録や新聞報道を読み、ほとんど分析の対象にはならない再刊本の現物を実際に手に取っては、断罪された作家が事後的に施す具体的な処置を確認するなかで、別の角度からも「文芸共同体」の一面が立ち現れることとなった。つまり、権力に抗して「書く自由」を求める文学者たちの協働意識、連帯、そして友愛の表明としての姿である。これは『GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力』(吉田書店、2021 年)所収の論文となり、またその後もリシュパンとマンデスの事例に絞ってさらに議論を発展させ、京都大学の人文研アカデミー2021 で発表している。

もうひとつ、やはり京都大学で開催されたボードレール生誕 200 周年シンポジウムに際しては、『悪の華』の詩人とマラルメの関係を「文芸共同体」の観点から再考することになった。いわばボードレールが遺した仕事の継承と展開、そして次世代への遺贈としてマラルメの営為を捉え直してみたのである。これは思いがけず、デカルト『方法序説』第 6 部からの残響を聴き取る結果にもなった。その一部を、短いエッセイとはいえ、「マラルメの「ボードレール」」として季刊『び〜ぐる 詩の海へ』第 53 号、特集：生誕二百年 ボードレールの現在と未来に掲載することができた。

自筆原稿を問題とした研究課題でもあったためか、こちらは幸いにも、幾つかの書簡などの一次資料を入手することができた。『書簡集』未掲載のものについては、「落ち穂拾いの記 マラルメ未公開資料(1)」(『EBOK』第 31 号)でもすでに公にしているが、引き続き資料収集とその公開を心がけていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中畑寛之	4. 巻 33
2. 論文標題 独立評論誌社版『詩集』(1887) 刊行譚 - 「古裂や貴重な布地の収集品を貼りつけるように」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 EBOOK (神戸大学仏語仏文学研究会刊)	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中畑寛之	4. 巻 1
2. 論文標題 『大鴉』、あるいは本の夢円居 - レスクリード、マネ、マラルメ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CORRESPONDANCES コレスポダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 313-327
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中畑寛之	4. 巻 31
2. 論文標題 落ち穂拾いの記 - マラルメ未刊行資料 (1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 EBOOK (神戸大学仏語仏文学研究会刊)	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中畑寛之	4. 巻 1
2. 論文標題 マラルメ三景 - 「地平を読み解く者」のまなざし	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 坂巻康司ほか編『象徴主義と<風景> - ボードレールからブルーストまで』	6. 最初と最後の頁 184-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中畑寛之
2. 発表標題 象徴主義と経済 - マラルメ の / と経済
3. 学会等名 「象徴主義」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中畑寛之
2. 発表標題 19世紀末フランスで裁かれた文学、その後 - リシュパン、マンデスを例として
3. 学会等名 人文研アカデミー-2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中畑寛之
2. 発表標題 ボードレールが終わったところから始める：マラルメの文学的 <生> について
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中畑寛之
2. 発表標題 マラルメによるマラルメ 詩人の自己演出
3. 学会等名 文芸事象の歴史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中畑寛之
2. 発表標題 「美との契約」に従って - 詩人マラルメと出版市場
3. 学会等名 マラルメ・シンポジウム2018 (日本マラルメ研究会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野呂泰、森本淳生、桑瀬章二郎、嶋中博章、辻川慶子、杉浦順子、中畑寛之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 331
3. 書名 GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力	

1. 著者名 ベルナル・テセードル (中畑寛之 訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 432
3. 書名 起源の物語 クールベの《世界の起源》をめぐって	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Mall'archives 関西マラルメ研究会アルシーヴ https://malarchives.wixsite.com/stephane-mallarme (工事中 en reconstruction)</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------